



音ちて一もをア野は。昨音トき立せもつ望リ宮ニる。昨音トき

「ここが」 聞きたい

県立大木材高度加工研究所（木高研、能代市）は今年、発足から25年を迎えた。国内の大学でも珍しい、木材を冠した研究機関として存在価値を高めてきた。4月に所長に就任した高田克彦教授に、研究の現状や木材産業の課題などを聞いた。

— 就任から1カ月半余りたった。
「木高研は真内外から研究者や企業関係者が多く訪れる施設。就任してすぐは新型コロナウイルスの感染拡大防止策に追われた。学生への教育という面では、遠隔講義の実施など苦勞も多いが、研究開発の面では、

高田 克彦さん(58)

県立大木材高度加工研究所所長

木高研発足から25年



今まで不変と思われていた考え方、価値観をもう一度問い直す

源全体の利活用や、化石資源依存からの脱却、都市の木質化な

びっくりするもの開発

きっかけになると考える。今回の節目は、次の四半世紀に向けたスタートだと受け止めている

— 木材を巡る研究はどう変わったか。
「最近では、国連が提唱する持続可能な開発目標(SDGs)に関連した地球規模での森林資

源全体の利活用や、化石資源依存からの脱却、都市の木質化な

「木材繊維から作るセルロースナノファイバーのような新たな木質系材料の開発や、木材の土木分野での利用などで新しい

たかた・かつひこ 61年11月、兵庫県明石市生まれ。北海道大学院博士課程修了。九州大助手などを経て01年県立大木高研助教授、07年から教授。専門は森林資源学。能代市末広町住。

チャレンジが続いている。一昨年完成した耐火試験棟では、県事業として中高層ビルの耐火基準を満たす秋田杉の柱や梁の開発も進んでいる」

— 新型コロナウイルスが林業や製材業

にも影響を与えている。

「以前から経営状況が厳しかった中、外的要因が駄目押しになって事業継続を断念するという構図は、2008年のリーマン・ショックとかなり似ている。裏を返せば、この10年余り、業界としての構造改革や体質改善が進んでいなかったと言えるのではないかと。木材が他の部材よりも優れているという価値を消費者に理解してもらったために

「木材繊維から作るセルロースナノファイバーのような新たな木質系材料の開発や、木材の土木分野での利用などで新しい

も、製品の品質管理を徹底するとともに、流通や住宅業界などとの協力体制を強化するべきだ。『平時は出荷できるが非常時には無理』という感覚では、これまでと一緒だ」

— これからの木高研の方向性は。

「やや変わった言い方だが、世の中のためになる、びっくりするものを開発できる、面白い研究組織でありたい。初代所長の佐々木光さん(故人)は、資源に依存していた本県の木材産業を、研究技術を核とした形に変えようとした。研究開発に対する外部からの評価も大事だと思っている。木高研の取り組みを真内外からもっと見てもらえるよう努力したい」

(聞き手 棟方幸人)